



シャッ!

◀シャッドテールのテールの波動でアピールさせ30センチ級のアカハタを釣り上げた ▲リフト&フォールで誘い、フォール中のアタリに会心の合わせが決まる

地方は梅雨入りが宣言されたと、台風2号の影響も多少あったようだ。前日までの風は止み、空は暗い。これはむしろ、根魚たちの警戒心を解く好条件と言えるのではないか……。とかく自分たちに有利に考えがちな我田引水的な釣り人思考を炸裂させる、E2F取材陣なのである。冒頭で「ブチ遠征」などと述べたものの、都心から東伊豆宇佐美港まではクルマで2時間ほど。遠いと言うのははばかられる距離だ。それでも伊豆には、大観光地にふさわしい華やかな景色がある。山と海が織りなす自然の豊かさは、そのまま「いい釣りができそう……」という予感につながる。港を離れて30分。小さな手石島のそば、水深約20メートルのポイントで釣りが始まった。離れ小島のすぐそば、である。テンションが上がる。魚がいるとしか思えない。魚の気配マンマンの矢口高橋の絵の中に入り込んだみたいだ。ヨッシーはビンビンスイッチマスクでスタートした。「マスク」は、ビンビンスイッチのヘッド部分にかぶせるだけのカスタムパーツだ。

イチロウはソフトルアー、釣友でありE2F取材班のトモキこと板倉友基さんはジグ。そしてライターのタカハシゴーはエサ。期せずして、てんでバラバラに釣りが始まった。すぐにアタリが出したのは、ビンビンスイッチマスクのヨッシーだった。いい竿の曲がりを見せたが、惜しくもフックオフ

30センチの壁にはばまれる キープサイズ狙いのアカハタ エサ、強し……。 永遠の初心者・タカハシゴーがキープサイズのアカハタをバツバツと釣っているのだ。そう、二階屋丸には「30センチ未満のアカハタはリリース」というレギュレーションが設けられている。これが燃える！ 少しでも大きいサイズを狙うために、知力体力時の運をすべて駆使するという、往年のアメリカ横断ウルトラクイズ的なオモシロ要素となっている。 ロックフィッシュに限らず、釣りにおいてサイズを狙うことはなかなか難しい。しかし、山が高いほど登山家が魂を燃やすように、難易度が高いほど釣り人も熱くなるのである。



▲手石島周りは根魚天国。アカハタやカサゴが乱舞

イチロウはソフトルアー、釣友でありE2F取材班のトモキこと板倉友基さんはジグ。そしてライターのタカハシゴーはエサ。期せずして、てんでバラバラに釣りが始まった。すぐにアタリが出したのは、ビンビンスイッチマスクのヨッシーだった。いい竿の曲がりを見せたが、惜しくもフックオフしてしまった。なぜか守りに入ったタカハシゴーはエビから始めたものの、「エサ取りが多すぎてすぐにポロポロになっちゃうな」と、カツオのハラモに変更。序盤は、ジグからハラモへと素早く替えたトモキがカサゴを、そしてタカハシゴーがアカハタを連発することになった。

吉岡進の釣りを楽しく感じるままに

E2F

Enjoy Every Fishing no.03

東伊豆宇佐美港出船のロックフィッシュゲーム

★雄大な自然に抱かれながら、釣り糸を垂れる。東伊豆宇佐美港は二階屋丸からのロックフィッシュゲームには、いつも伸びやかな空気がある。「ルアーでもエサでもなんでもOK」というフリースタイルは、森昌史船長の笑顔と同様に、釣り人に優しい……かのように見える。だが、自由だからこそ、自らルールを設けなければ、釣りの本当の面白さには近付けない。

文◎高橋剛 撮影◎本誌編集部

なんで だろうねえ



釣り人の心をヒットする言葉、「フリースタイル」。ここに「ブチ遠征」が加わると、これはもう楽しさ全開、盛り上がりにはいられない。ありとあらゆる釣りを、分け隔てなく、思いっ切り楽しんでしまおうのが、エンジョイ・エプリー・フィッシング——E2F取材陣の（数少ない）取り柄である。今回訪れるのは、東伊豆宇佐美港の二階屋丸だ。チャージングな笑顔と優しい語り口調の森昌史船長の操船で、ロックフィッシュを狙う。主にはアカハタやカサゴだ。「フリースタイルでOKです」と森船長。キタ！ フリースタイル。とてもうれしい。ルアーなら、3〜4インチのソフトルアー。シャッドテール、カーリーテール、クロー系などが主軸だ。ジグは30〜60グラム。そして森船長は「テンヤなら8〜10号ですかね」と付け加えた。エサ釣りもOKなのだ。ルアー釣りとエサ釣りの両方が存在していることは、船釣りになんとも絶妙な面白さをもたらしていると思う。イメーజ的には「ルアーって言ったって、しよせんは疑似餌でしょう？ ホンモノのエサに

は敵わないよ」と思いがちだ。しかし、魚の活性や海の状況によつては、必ずしもそうとは言えない。ルアー釣りとエサ釣りの両方OKというフリーダム系の船に乗船したことがある方ならご理解いただけると思うが、エサ釣りが常に圧勝ではない。一般論としては、活性が低いときほどエサが有利で、高いときほどルアーが有利という傾向がある。活性が低いと匂いや味に、活性が高いと動きに反応しやすいようだが、絶対とは言えない。とにかく「絶対」というものがない、ということだけが、絶対の真理なのだ。エサとルアーの両方を経験すると、そのこと

ソフトルアー、ジグ、エサ……。フリーダムな釣りがスタート 主役であるヨッシーことジャッカル・プロスタップの吉岡進さんの頭の中に、「エサ」の2文字はなかった。ヨッシーは、どんな釣りにも喜びを感じる感性の持ち主だ。ルアー釣りにこだわっているわけではなく、エサ釣りも楽しむ。 「ルアーでもエサでも、どっち

がより鮮明になる。とか言いつつ、E2F取材班のイチロウこと鹿島一郎さんと、ライタータカハシゴーは、事前にインソインとエサ釣りの準備をしていた。せっかく東伊豆までブチ遠征するのだ。なんととても魚の顔を見たいという欲望が高まり、確実性安全性安定感を追求すべく、つまり万一の低活性時の安パイ狙いでエビとカツオのハラモを用意するのであった。



▲釣り場は宇佐美〜網代沖の水深20メートル前後

